

# 臨床看護学・助産学専攻科

## 1 構 成 員

	平成 25 年 3 月 31 日現在	
教授	1 人	
准教授	3 人	
講師（うち病院籍）	5 人	(0 人)
助教（うち病院籍）	7 人	(0 人)
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	1 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	0 人	
大学院学生（うち他講座から）	21 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	4 人	
その他（技術補佐員等）	0 人	
合計	42 人	

## 2 教員の異動状況

野澤 明子（教授）	（H9.4.1 採用；H13.8.1～H25.3.31 退職）
久保田君枝（准教授）	（H17.4.1～現職）
永井 道子（准教授）	（H16.10.1～20.7.31 講師；H20.8.1～H25.3.31 退職）
佐藤 直美（准教授）	（H9.8.1～H18.3.31 助手；H18.4.1～講師；H23.10.1～現職）
宮城島恭子（講師）	（H14.1.1～H17.3.31 助手；H17.4.1～現職）
安田 孝子（講師）	（H16.4.1～現職）
倉田 貞美（講師）	（H18.6.1～現職）
中川 理恵（講師）	（H21.4.1～現職）
武田江里子（講師）	（H21.4.1～現職）
杉山 琴美（助教）	（H16.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）
足立 智美（助教）	（H16.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）
牧野公美子（助教）	（H18.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）
坪見 利香（助教）	（H19.4.1～現職）
河島 光代（助教）	（H21.11.1～現職）
廣岡 亜美（助教）	（H22.7.1～H25.3.31 退職）
田坂 満恵（助教）	（H22.4.1～現職）
羽持 寛子（特任助教）	（H23.4.1～H25.3.31 退職）
村上 静子（教務補佐員）	（H21.4.1～現職）
佐藤 裕紀（教務補佐員）	（H24.4.1～現職）

### 3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成 24 年度	
(1) 原著論文数 (うち邦文のもの)	5 編	(3 編)
そのインパクトファクターの合計	4.02	
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	0 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(3) 総説数 (うち邦文のもの)	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数 (うち邦文のもの)	3 編	(3 編)
(5) 症例報告数 (うち邦文のもの)	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	

#### (1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

##### A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 武田江里子、小林康江、加藤千晶、母親の子どもに対する「愛着-養育バランス」尺度の開発 第2報—尺度としての信頼性と妥当性—、日本看護科学学会誌、32巻4号、22-31、2012

##### B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. Suzuki M, Kurata S, Yamamoto M, Makino K, Kanamori M: Impact of Fall-Related Behaviors as Risk Factors for Falls Among the Elderly Patients With Dementia in a Geriatric Facility in Japan. American Journal of Alzheimer's Disease and Other Dementias, 27(6): 439-46, 2012.
2. Elakeche E, Sato N, Nishizawa D, Kageyama S, Yamada H, Kurabe N, Ishino K, Tao H, Tanioka F, Nozawa A, Chen R, Shinmura K, Ikeda K, Sugimura H: Association between dopamine beta hydroxylase rs5320 polymorphism and smoking behaviour in elderly Japanese. J Hum Genet 57, 385-390, 2012.

インパクトファクターの小計 [ 4.02 ]

##### C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ, 河野由美, 酒井郁子, 河津芳子, 中村鈴子, 岡光京子, 新谷恵子, 城生弘美, 谷口好美, 坪見利香:看護系大学における教養教育に関する研究, 日本看護学教育学会誌, 22 (2), 41-52, 2012.
2. 高橋由美子, 大見サキエ, 宮城島恭子: 学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセス, 日本看護科学学会誌, 32(3), 35-44, 2012.

#### (2-1) 論文形式のプロシーディングズ

#### (2-2) レター

#### (3) 総説

#### (4) 著 書

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
1. 中川理恵：第4章 2-4A 腹膜透析，看護学テキスト NiCE 成人看護学 成人看護技術（野崎真奈美、林直子、佐藤まゆみ、鈴木久美編），328-331，南江堂，2012.
  2. 牧野公美子：第1章さまざまな場面で活用されるタクティールケア「症状緩和としてのケア」．鈴木みずえ・木本明恵・原智代・千葉京子 編，始めてみようよタクティール®ケア，25-27，クオリティケア，2012.
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
1. 尾島俊之，倉田貞美：保健指導ノート 2013、日本家族計画協会、高齢者保健福祉、東京 10-1-10-12、2012
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

#### (5) 症例報告

### 4 特許等の出願状況

	平成 24 年度
特許取得数（出願中含む）	0 件

### 5 医学研究費取得状況

(万円未満四捨五入)

	平成 24 年度
(1) 文部科学省科学研究費	8 件 (1245 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	0 件 (0 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件 (0 万円)
(4) 財団助成金	1 件 (300 万円)
(5) 受託研究または共同研究	1 件 (30 万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0 件 (0 万円)

#### (1) 文部科学省科学研究費

1. 野澤明子（代表者）、佐藤直美、中川理恵（分担者） 基盤研究（C）糖尿病性腎症患者が抱える問題状況を環境要因の構造からアプローチする取り組みの検討 20万円（継続）
2. 中川理恵（代表者） 基盤研究（C）慢性心不全患者の身体感覚へ働きかけるケアモデルの開発にむけた基礎的研究 40万円（新規）
3. 杉山琴美（代表者） 若手研究（B）多胎妊娠を告げられた女性の看護実践モデルの構築 110万円（継続）
4. 廣岡亜美（代表者） 若手研究（B）褥瘡ケアに応用するための褥瘡肉芽組織の評価指標の検討 110万円（新規）
5. 久保田君枝（代表者）基盤研究C、低出生体重児の増加および体重増加に及ぼす妊婦の栄養状態に関する縦断的研究（継続）平成23年度～25年度
6. 安田孝子（代表者）、久保田君枝、尾島俊之 挑戦的萌芽研究、母親の清潔なおしゃれ意識と

チャイルド・マルトリートメント予防に関する新機軸研究 290万円（新規）

7. 武田江里子（代表者）、挑戦的萌芽研究、母親の養育者としての発達に関する研究—「愛着-養育バランス」尺度の活用—、平成23年度～25年度

8. 足立智美（代表者）若手研究(B) 子宮頸部異形成患者の看護実践モデルの構築にむけて 90万円（新規）

(2) 厚生労働科学研究費

(3) 他政府機関による研究助成

(4) 財団助成金

1. 佐藤直美（分担者）肺がんの遺伝子多型—肺胞上皮がんの網羅的解析および喫煙行動の遺伝子多型— 財団法人喫煙科学研究財団 300万円（継続） 代表者 梶村春彦（腫瘍病理学）

(5) 受託研究または共同研究

1. 久保田君枝（代表者）産学連携臨床研究 乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の開発 — 試作品の効果検証— 30万円（継続）

## 6 新学術研究などの大型プロジェクトの代表，総括

## 7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	1件
(3) 学会座長回数	0件	2件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	6件
(6) 一般演題発表数	4件	

(1) 国際学会等開催・参加

- 1) 国際学会・会議等の開催
- 2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演
- 3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表
- 4) 国際学会・会議等での座長
- 5) 一般発表

口頭発表

ポスター発表

1. Kurata S: Physical Restraint of Home-dwelling Elders: Perception by Home Care Providers, American Geriatrics Society 2012 Annual Scientific Meeting, 2-5 May 2012, Seattle (USA)
2. Kubota K, Tasaka M, Hamochi H, Yasuda T, Fukuoka K: The relationship between body weights of mothers and children and nutrition during pregnancy, The ICM Asia Pacific Regional Conference 2012, Ha Noi, Viet Nam, July 24-26, 2012.

3. Yasuda T, Ojima T, Nakamura M, Nagai A, Tanaka T, Kondo N, Suzuki K, Yamagata Z: The relationship between mothers' recognition of child maltreatment and kinds of their main adviser of child-rearing at different stages after birth in Japan, The ICM Asia Pacific Regional Conference 2012, Ha Noi, Viet Nam, July 24-26, 2012.
4. Adachi T, Shimada M, Kubota K, Correlation between Pelvic Tilt and Pain During a Pregnancy, The ICM Asia Pacific Regional Conference 2012, Ha Noi, Viet Nam, July 24-26, 2012.

(2) 国内学会の開催・参加

- 1) 主催した学会名
- 2) 学会における特別講演・招待講演
- 3) シンポジウム発表
  1. 武田江里子、母親の子どもに対する「愛着-養育バランス」の変化と養育者としての発達に関する研究—「愛着-養育バランス」尺度を用いた子育て支援の可能性—、第8回浜松医科学シンポジウム、2012.11.30
- 4) 座長をした学会名
  1. 野澤 明子 第6回日本慢性看護学会 2012.6. 浜松
  2. 久保田君枝 第25回静岡県母性衛生学会 2012.9.2

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 野澤明子 日本慢性看護学会評議員
2. 野澤明子 日本看護研究学会 専任査読員
3. 中川理恵 日本糖尿病教育・看護学会 専任査読員
4. 久保田君枝 日本母性衛生学会 理事
5. 久保田君枝 日本看護医療学会 査読委員
6. 久保田君枝 静岡県母性衛生学会 理事

## 8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

- (1) 国内の英文雑誌等の編集
- (2) 外国の学術雑誌の編集
- (3) 国内外の英文雑誌のレフリー

## 9 共同研究の実施状況

	平成24年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	5件
(3) 学内共同研究	2件

(1) 国際共同研究

(2) 国内共同研究

1. 倉田貞美、牧野公美子、村上静子 梅林ゆきゑ (浜松北病院)、芥川知奈 (浜松北病院) : 一般病院に入院する高齢者への unnecessary 身体拘束を解除する看護モデルの構築
2. 鈴木みずえ、牧野公美子、菊地慶子、木本明恵 (日本スウェーデン福祉研究所)、中込敏寛 (日本スウェーデン福祉研究所) : タクティールケア認定取得者アンケート調査における“触れるケア”の効果と意義の検討
3. 大見サキエ, 石田寿子 (天理医療大学), 宮城島恭子, 高橋由美子, 坪見利香, 加藤千明 (相山女学園大学) : 小児がん当事者の内面に迫る教育方法の検討
4. 大見サキエ, 石田寿子 (天理医療大学), 河合洋子 (宝塚大学), 金城やす子 (名桜大学), 平賀健太郎 (大阪教育大学), 加藤千明 (相山女学園大学), 宮城島恭子, 坪見利香, 他 : がんの子どもへの復学支援プログラム構築のための基礎的研究
5. 佐藤直美, 梶村春彦 (腫瘍病理学), 谷岡書彦 (磐田市立総合病院検査科), 池田和隆 (東京都医学総合研究所) 喫煙行動と遺伝子多型の関連

(3) 学内共同研究

1. 牧野公美子、倉田貞美 : 認知症高齢者のエンドオブライフ・ケア充実に向けた家族ケア実践能力育成に関する検討
2. 坪見利香, 兒島佳子, 宮城島恭子 : 学生が事前に課題設定をして統合看護実習に臨んだ教育効果の検討

## 10 産学共同研究

	平成 24 年度
産学共同研究	1 件

1. 久保田君枝 (代表者) 産学連携臨床研究 乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の開発  
— 試作品の効果検証 —

本研究は、企業との共同研究により、児頭の変形を予防するための臥床時の接触圧を軽減する寝具を開発し、その効果と安全性を検証することを目的とするが、今回はその第一次調査として試作品の体圧分散と減圧の効果、睡眠に伴う快適性と安全性について検証する。

結果：試作品マットは従来のマットより体圧分散効果、減圧効果があった。試作品マットの体圧分散により頭部の変形を予防できる可能性が示唆された。

(久保田君枝 田坂満恵 足立智美 兒島佳子 羽持寛子)

## 11 受賞

- (1) 国際的な授賞
- (2) 外国からの授与
- (3) 国内での授賞

## 12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

### 1. 急性心筋梗塞患者の家族員への看護の探究

以前より、急性心筋梗塞患者の家族員における病いの経験を、現象学の思考をもとにつまびらかにし、看護実践の可能性を探究している。平成 24 年度は、急性心筋梗塞を患い低心機能となった患者の配偶者の経験の営まれ方を明らかにし、成果をまとめ投稿した。

(中川理恵)

### 2. 慢性心不全患者の身体感覚へ働きかけるケアモデルの開発にむけた基礎的研究

慢性心不全は心疾患末期の状態像であり、急性増悪を繰り返し慢性的に経過する。本研究では、このような疾患を患う慢性心不全患者が感じている、ある身体感覚に注目している。これを明らかにする前段階として、平成 24 年度は一つ概念についての文献検討を行った。

(中川理恵)

### 3. 多胎児を妊娠した女性の妊娠継続に関する意思決定過程

多胎児を妊娠した経験を持つ女性に対して行ったインタビューデータの逐語録の作成と分析を進めている。対象者へのインタビューを引き続き実施予定である。

(杉山琴美)

### 4. 65 歳以上の急性前骨髄球性白血病患者における QOL 評価

高齢 APL 患者の QOL と有害事象の発生との関係を検証し、患者が QOL を保ちながら治療を受けるために必要な看護方略を検討することを目的に、調査を実施している。

(杉山琴美, 竹下明裕<sup>1</sup>, 野澤明子) 1 輸血・細胞治療部

### 5. 脳卒中患者が体験する病いの意味

進行性脳卒中の中でも Branch atheromatous disease(BAD)は、ラクナ症候群を呈するが、治療抵抗性で機能予後が不良な場合が多く、運動麻痺という身体障害を抱える患者の苦悩は非常に大きい。この研究の目的は、援助場面での具体的な経験の語りから、患者が体験する世界を探り、そのテーマから主観的体験を構造化し、病いの意味を明らかにしていくことを目的とした研究である。今年度は研究成果の学会への発表を行う予定である。また、引き続き研究を継続していく。

(河島光代)

### 6. 高齢者における遺伝子多型と喫煙行動との関連

60 歳以上の約 2500 名の外来患者を対象に遺伝子多型と喫煙行動との関連を検討した。Dopamine beta hydroxylase rs5320 遺伝子多型と一日喫煙本数およびニコチン依存度テスト FTND との関連が見られ、今年度論文掲載された。他複数の多型について検討し、結果を投稿準備中である。

(Ellakeche Ella<sup>1</sup>, 佐藤直美, 西澤大輔<sup>2</sup>, 影山信二<sup>1</sup>, 山田和孝<sup>1</sup>, 倉部誠也<sup>1</sup>, 石野佳子<sup>1</sup>, 陶弘<sup>1</sup>, 谷

岡書彦<sup>3</sup>, 野澤明子, Chen Renyin<sup>1</sup>, 新村和也<sup>1</sup>, 池田和孝<sup>2</sup>, 梶村春彦<sup>1</sup>) 1 腫瘍病理学 2 東京都医学総合研究所, 3 磐田市立総合病院検査科

#### 7. 慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度に関する研究

腰痛を含む痛みは主観的な体験であり、それをどうとらえ、解釈するか、どう向き合うかは個々により、また、人種や民族などによっても異なり、様々な要因に影響を受けている。痛みを体験している患者がそれをどのようにとらえ向き合っているかを明らかにすることを目的に、米国のリハビリテーションクリニックに通院する慢性腰痛患者6名にインタビューを行った。今後分析予定である。

(佐藤直美、佐藤友紀、Rob Stanborough, 増田健二、中川理恵)

#### 8. 一般病院に入院する高齢者への不必要な身体拘束を解除する看護モデルの構築

身体拘束は深刻な廃用性の機能障害を生むばかりか、尊厳を著しく脅かす人権侵害行為と認識されている。多くの医療処置が実施されている一般病院では、医療処置を安全に遂行し生命を守るための看護対応として、身体拘束以外の方法が確立していない。

そこで、これまでにA病院の看護部との共同研究として、パーソンセンタードケアの研修会、認知症高齢者との超コミュニケーション法：バリデーシオンの研修会を計6回、ワークショップを2回、身体拘束を実施している事例についてパーソンセンタードケア等の視点から検討会を計6回、困難事例については4回の検討会を実施した。2012年はそれらを通して高齢者への身体拘束に関する看護師の認識がどのように変化していったのか、その詳細なプロセスを明らかにするため面接調査を実施した。現在論文作成に向けて質的な分析に取り組んでいる。

また、研修会前後における身体拘束減少効果と看護師の認識変化について調査し、統計的に有意な変化について学会発表をした。さらに論文にして学会誌に投稿中である。

(倉田貞美、牧野公美子、村上静子)

#### 9. 認知症高齢者のエンドオブライフ・ケア充実に向けた家族ケア実践能力育成に関する検討

本研究は、入所高齢者の家族に対する看護師のケア実践能力育成に関する基礎的資料を得るために、家族と看護師の認識および看護師の家族ケア実施状況等を把握することを目的とした。中部地方にある100ヶ所の介護老人保健施設の調査協力を得て質問紙調査を実施し、家族594名、看護師647名から回答を得た。平成24年度には研究成果を学会発表した。現在、学会誌への論文投稿の準備をしている。

(牧野公美子、倉田貞美)

#### 10. タクティールケア実践者のケア肯定感の因子構造とその関連要因

タクティールケアはスウェーデンで開発されたタッチとマッサージの中間的な位置づけにあるケア手法であり、現在、わが国でも認知症ケアに取り入れられている。本調査では、タクティールケアIコース認定取得者476名を対象に郵送による無記名自記式質問紙調査を実施し、タクティールケアに関する意識の因子構造と関連要因を明らかにした。平成25年度の学会誌に



掲載される。

(牧野公美子、鈴木みずえ、菊地慶子、木本明恵、中込敏寛)

#### 11. 小児がん当事者の内面に迫る教育方法の検討

看護学生が小児がん当事者の経験談を聴くことで、当事者の内面にどこまで迫ることができ、どのような看護の課題を見出したのか明らかにし、より充実した当事者参加授業の教育方法を検討する資料とすることを目的にした研究である。がんの当事者や家族の手記を読んで、小児がん当事者による講義を聴いた後の学生のレポートを質的に分析し、学会発表を行った。

(大見サキエ、石田寿子 (天理医療大学) , 宮城島恭子、高橋由美子、坪見利香、加藤千明 (相山女学園大学)

#### 12. 褥瘡ケアに応用するための褥瘡肉芽組織の評価指標の検討

本研究では、褥瘡の肉芽組織を判定するための客観的な指標を検討した。皮膚潰瘍を有する患者7名の創傷10カ所を対象に pH 試験紙、創部の写真、サーモグラフィーを用いて、経時的に最長4週まで施行した。その結果、色相とサーモグラフィーを用いることで、より客観的に肉芽組織を観察できた。本研究の問題点は、対象患者数が少なく、経時的な観察が困難であったが、創傷の色相と表面温度の評価は、客観的な評価指標としての有用である可能性を示した。今後、調査期間、対象施設、対象者の選定方法などを再考し、研究を継続していく予定である。

(廣岡亜美)

#### 13. 低出生体重児の増加および体重増加に及ぼす妊婦の栄養状態に関する縦断的研究

妊婦の栄養摂取状況からみた、妊婦の体重増加と胎児の発育状況を縦断的に調査し、低出生体重児の要因を明らかにすることにより、低出生体重児の出生を予防することを目的とする。

本研究では妊娠期間を初期・中期・末期の3期に区分し、各期間の妊婦の食事をデジタルカメラにて撮影、写真から管理栄養士が栄養素別に摂取内容を分析する。さらに妊婦健診時には各時期の妊婦の体重増加と胎児の推定体重等を測定し、妊娠期間中の食事の質と量のバランスの良否と妊婦の体重増加と各期間の胎児の発育状況などを照合しながら縦断的に検証する。

結果：妊婦の摂取エネルギーは推奨値を大きく下回っていることが明らかとなった。妊娠第1期の母体の栄養摂取量が妊娠期間の母体体重に関連すること、非妊時・すべての妊娠期間の母体体重が出生時体重と有意な正の相関を示した。

(久保田君枝 田坂満恵 羽持寛子 福岡欣治)

#### 14. 出産後の時期別における母親の子どもへの虐待の認識と子育ての相談相手との関連

日本における出生後3,4か月、18か月、36か月時点の母親の子どもへの虐待の認識と相談相手との関連を明らかにした。健やか親子21の中間評価のために、2009年に日本中から無作為に抽出された市町村において横断研究として自記式質問紙調査を実施した。分析対象者は出生後3,4か月5,343人、18か月8007人、36か月7251人、合計20,601人であった。出産後の母親の子どもへの虐待の認識と子育ての相談相手との関連はロジスティック回帰分析を行った。出生後

3,4 か月、18 か月、36 か月時点の子育ての相談相手によるオッズ比(95%信頼区間)は、「夫婦」0.73 (0.52-1.02)、0.64 (0.54-0.77)、0.57 (0.49-0.67)、「祖父母」0.52 (0.38-0.70)、0.66 (0.56-0.77)、0.89 (0.77-1.03)、「保健師・助産師」0.54 (0.28-1.03)、1.48(1.04-2.11)、2.52 (1.68-3.79)であった。母親が身近な夫や祖父母に気軽に相談できる環境にあると虐待を起こしにくい可能性が示唆された。保健師・助産師は出産後の母親からの子育て相談があった場合は虐待支援を視野に入れる必要性が示唆された。

(安田孝子、尾島俊之)

#### 15. 母親の清潔なおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメント予防に関する新機軸研究

おしゃれをしたいという気持ちは多くの女性が抱いている気持ちである。しかし、子育て中は自分がおしゃれをするよりも子どもの世話を優先しなければならない場合があり、我慢する必要があり、葛藤がある。そのような母親の気持ちに上手に折り合いをつけるのは子どもとの愛着が鍵となる。本研究の目的は、母親のおしゃれ意識と子どもとの愛着形成の関連を明らかにすること、母親のおしゃれ意識と子どもの睡眠の状態の関連性を明らかにし、家族を支援する看護の示唆を得ることである。平成24年度は、アメリカ合衆国における Health Family of America の研修を安田と久保田が受け、チャイルド・マルトリートメント予防のスキルを学習した。

(安田孝子、久保田君枝、尾島俊之)

#### 16. 母親の養育者としての発達に関する研究—「愛着-養育バランス」尺度の活用—

母親の養育者としての発達過程を明らかにし、個々の発達に応じた支援策を講じることを目的としている。そのため平成21~22年度に尺度開発を行い、信頼性・妥当性についての論文が昨年度の第1報に続き、第2報として学会誌に掲載された。乳幼児健診での活用について地域の保健師と検討を重ね、現在短縮版の作成とともに有効性について調査中である。産後1か月からの継続調査も1歳半まで進み、途中経過を分析し、一部学会にて発表した。

(武田江里子、小林康江)

#### 17. 子宮頸部異形成患者の看護実践モデルの構築にむけて

子宮頸がん検診で異常を指摘された患者への看護実践を明らかにするために、看護職への質問紙調査を実施した。現在分析中である。

(足立智美)

### 13 この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

### 14 研究の独創性，国際性，継続性，応用性

### 15 新聞，雑誌等による報道